建築家が設計した住宅

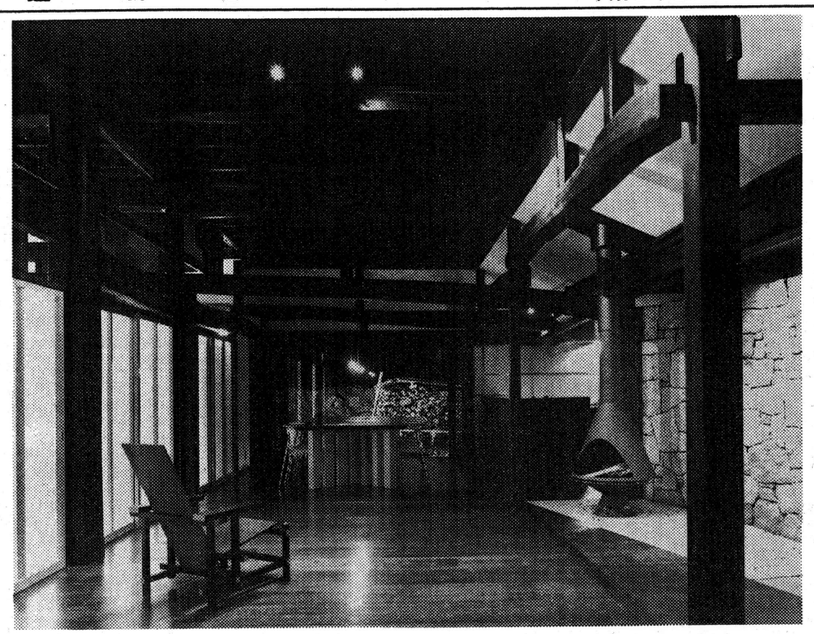
榛原の家

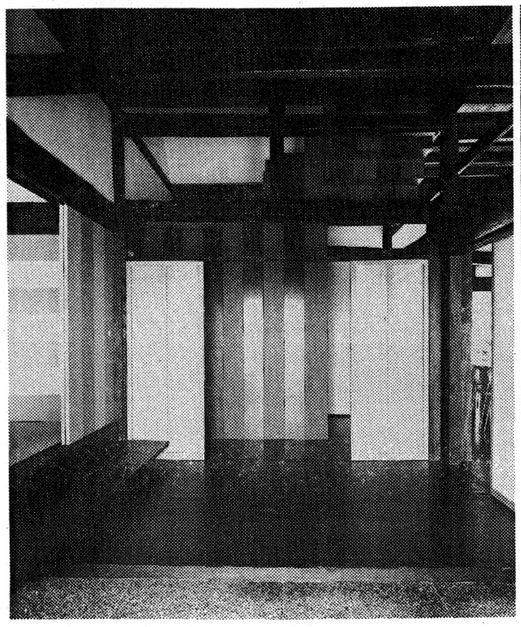
設計　平井憲一氏

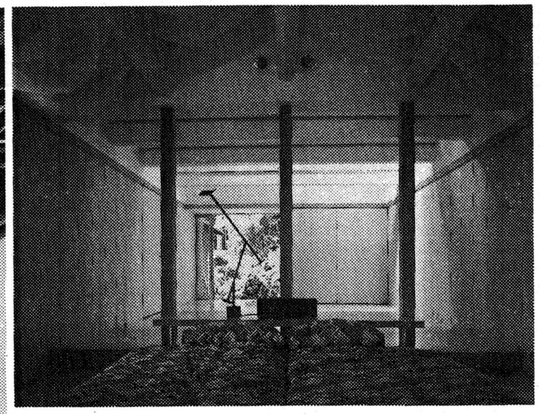
建築場所	奈良県宇陀郡
敷地面積	1,820㎡
建築面積	203.07㎡
延床面積	371.92㎡
（1階	203.07㎡）
（2階	168.85㎡）
非工事部分	123.00㎡

80年前の民家改造

柱・梁の力強さ生かして







約八十年前に建てられた民家の改造で屋根は既存のまま（左上）リビングルームからダイニングを見る、太い柱・梁と石積みの壁がマッチしている（右上）玄関（左横）小屋組みの天井に紗のスクリーンをプラスして柔らかさを演出した寝室（右横）

西名阪国道の針インターを降りて、深々とした緑の中を進むと、時代の流れとは無縁のような十六軒の集落が姿を現わす。さらに、そのT字路を左に進むと帳に一軒家が建っている。西側は竹林、北側は杉木立が建物を包み込んでいて、南を望めば山々に雲が連なっている。それは天上から下界を見下ろす趣きである。

この農家は明治四十三年に建てられたもので、平井さんの友人であるグラフィック・デザイナーが、家族三世帯・十人の同居を目的とし改造を前提に購入した。

改造前の建物は傷みがひどかった。住居の形態も昔の生活様式に根ざしたものであり、現代人がそのままで住むことは難しい状態であった。

しかし、この建物は長い年月を奥まった山里で連綿と生き続けてきた力強さと生命力、それに人肌にも似たぬくもりを持っていた。民家の改造を考える場合、二つの選択がある。一つは基本的に既存の形態をそのまま復元する方法であり、もう一つは現代の生活形態に根ざした改造である。ここでは後者の〝蘇生〟させる道が選択された。

時代を超えて現存する古きものの中から必要なモノと不必要なモノを選択し、新しいものの中から必要なモノを挿入する作業が始められた。

具体的には、わら葺きを鉄板で覆った屋根は基本的にそのままとし、小屋裏の子供室に光を導入するためのトップライトが付加された。既存の柱・梁の力強い架構はできる限り生かす方針が採られたが、足元の傷みがひどく、一旦骨だけにし補強して、もう一度組み立てるという作業を行っている。

新しく挿入するモノは、民家の持つ重々しさと暗さを払拭するために、日本的なモノを使用せずに、あえて和の空間に〝洋〟を持ってきている。そこには、一元の空間にかえすのではなく、新しい空間を創造するという平井さんの姿勢が読み取れる。

リビングルームの暖炉の後に配置された石積みの壁がその一例だが、太い柱・梁の力強い架構とマッチして、存在感のある空間を構成している。ダイニングの造り付けのテーブルやリビングの椅子には〝赤〟が意識的に使われているが、これも民家の持つ暗さに対する対応である。

こうした異質のモノを受け入れて、それがちぐはぐなく溶け込んでいるのは、それらが新建材などではなく、石や木など人に優しい自然の材であることにもよるが、長い年月を連綿として生き続けてきた民家の奥の深さに負う所も大きい。

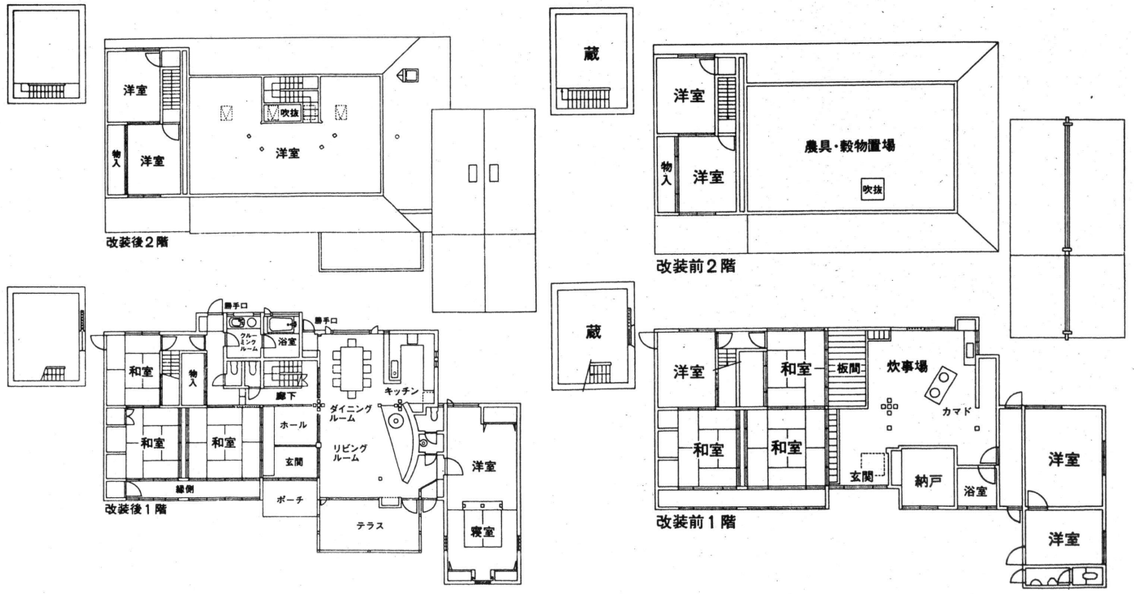
暖炉は、夏の生活に対応するようにつくられている民家では、普通の暖房では対応しきれないという判断から、八千八百㌔㌍の大型を導入している。暖炉は実際に火が燃えているという心理的な効果も大きく、そこからは温度以上にぬくもりが伝わってくる。これは、裏山から薪が容易に手に入るという山里の環境に対応した暖房でもある。

リビングルームには石貼りのテラスをつなげ、空間の拡がりをより大きなものにしている。囲われたこのテラスは室内の感覚であり、視覚的にもリビングのボリュームを大きくしている。

寝室も大幅に改造され、床と壁には楊ベニアを貼り、天井は既存の小屋組みを補修し、紗のスクリーンを吊ることで寝室らしい柔らかさを演出している。

部屋の単位はできるだけ大きくし、仕切りを取り払えばさらに開かれるようにしている。力強さと生命力を持った柱・梁が構成する、大きく豊かな空間は住み手に限りなく優しい。

（写真＝松村芳治氏）



平井憲一氏　一九五一年大阪生まれ　七九年アトリエ・サム一級建築士事務所開設　八八年平井憲一建築事務所に改名。八五年商環境デザイン賞入選　八六年同賞およびナショップ賞　八八年商環境デザイン賞二作品入選